ミニシンポジウム

愛知大学
AICHI UNIVERSITY

20 世紀前半の中国地域社会における「民族」の諸相

―西南辺境の非漢族集団と北方の漢族を事例として―

日時：2023 年3月 17 日(金)
14:30～16:30
場所：愛知大学豊橋校舎
愛知大学記念館

司会

愛知大学東亜同文書院大学記念センター長
加納　寛

1.報告

①林謙一郎（名古屋大学大学院文学研究科・准教授）
大理「甲馬」からみた雲南における民族の「形成」と「認定」

②羅椿詠（雲南大学外国語学院日本語学部・副教授）
民国時期における雲南とチベットの辺茶貿易：普思沿辺を中心に

③松岡正子（愛知大学現代中国学部・教授）
年画「連年有余」の流行からみた北方地域社会の諸相

2.全体討論

主催　愛知大学東亜同文書院大学記念センター
お問い合わせ先　〒441-8522　豊橋市町畑町 1-1　愛知大学豊橋キャンパス内
TEL:0532-47-4139　Email:toa@ml.aichi-u.ac.jp

【趣旨】

20 世紀前半（清末民初）の中国は、諸外国からの侵略とそれに対応できない清王朝、災害や各地の反乱などの要因から「混乱」を極めた時代であった。しかしそのような時代にあっても、民衆は様々な方法によって活路を求め、生きぬいた。

本シンポジウムでは、そのような「混乱」の時代のなかで多様に生きた民衆の姿とその歴史的社会的背景について、中国西南辺境の非漢族集団と北方の漢族の動態を事例として、歴史学や民俗学等の視点から討論する。

【報告内容】

①林謙一郎（名古屋大学大学院文学研究科・准教授）
大理「甲馬」からみた雲南における民族の「形成」と「認定」

雲南、大理地区で今も作られている素朴な年画の一種「甲馬」。これを作る人々は現在は「白族」と呼ばれているが、20 世紀前半までは「民家」と称していた。彼らは雲南土着の民族であり、1950 年代の「民族識別」によって白族という新しい名を得たというが、一方では 20 世紀前半に大理を訪れた欧米人の記録では、民家は「Local Chinese」と呼ばれている。両者の定義にはどのような差異・ずれが存在するのか。民家～白族を手がかりに、中国における「民族」のありかたについて再考したい。

②羅椿詠（雲南大学外国語学院日本語学部・副教授）
民国時期における雲南とチベットの辺茶貿易：普思沿辺を中心に

民国初期、内乱と匪賊の影響を受けて、引岸制に基づいた四川辺茶貿易ネットワークの構造は事実上崩壊した。同時にチベット人および古宗人が思茅の製造した緊茶を購入し、阿墩子を経由してチベットに販売し始め、その後運送ルートが穏やかではなかったため中止せざるを得なかったが、一部の茶商人がビルマを経由してチベットに茶を運び、佛海を中心とする普思沿辺の辺茶生産地域を形成した。民国時期における普思沿辺の緊圧茶の種類、辺茶の製法、生産量、流通の実態に関する一考察。

③松岡正子（愛知大学現代中国学部・教授）
「年画「連年有余」の流行からみた北方地域社会の諸相」

年画は、様々な吉祥表現が描かれた「謎解き絵」である。民衆は、それをそれぞれの知識や経験、その時の心願に基づいて解釈し、願いを込める。清初康熙年間から流行した「娃娃画」（子どもの絵）は、特に天津・楊柳青で盛んに生産された。なかでも「連年有余」は最もよく知られた図柄で、現在も人気がある。「連年有余」の解読を通して、当時の世相を考える。

愛知大学記念館
愛知大学東亜同文書院大学記念センター

【開館時間】１０時～１６時　入館無料・自由見学
【閉館日】　土・日・祝日、大学が定める休日

愛知大学記念館　検索

愛知大学記念館/豊橋校舎　（1908 年～）

愛知大学設立者
名誉学長　本間喜一展示室

東亜同文書院（1901～1945 年）
【※虹橋路校舎/1915～1937 年】